

Kokoro – Sensei’s Testament – Parts 10-18 (Natsume Sōseki)

じゅう
十

「金に不自由のない 私 は、騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えてみようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅を留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、といった訳で、ちよくらちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。ある日私はまあ宅だけでも探してみようかというそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。電車の通路になってから、あそこいらの様子が始まるで違っていました。その頃は左手が砲兵工廠のどべいみぎはらおかくうちくさいちめんはなかに立って、何心なく向うの崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずっとあの西側の趣が違っていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。私はふとここいらに適当な宅はないだろうかと思いました。それで直ぐ草原を横切って、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだに好い町になり切れないで、がたびししているあの辺の家並は、その時分の事ですからずいぶん汚らしいものでした。私は露次を抜けたり、横丁を曲ったり、ぐるぐる歩き廻りました。しまいに駄菓子屋の上さんに、ここいらに小ぢんまりした貸家はないかと尋ねてみました。上さんは「そうですね」といって、少時首をかしげていましたが、「かし家はちよいと……」と全く思い当たらない風でした。私は望のないものと諦らめて帰り掛けました。すると上さんがまた、「素人下宿じゃいけませんか」と聞くのです。私はちょっと気が変わりました。静かな素人屋に一人で下宿しているのは、かえって家を持つ面倒がなくて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんがいいました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあって、邸が広過ぎるので、そこを売り払って、ここへ引っ越して来たけれども、無人で淋しくって困るから相当の人があったら世話をしてくれと頼まれていたのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人と一人

娘と下女より外にいないのだという事を確かめました。私は閑静で至極好かろうと心の中心に思いました。けれどもそんな家族のうちに、私のようなものが、突然行ったところで、素性の知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛念もありました。私は止そうかとも考えました。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装はしていませんでした。それから大学の制帽を被っていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだと。けれどもその頃の大学生は今と違って、大分世間に信用のあったものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出したくらいです。そうして駄菓子屋の上さんに教わった通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家を訪ねました。

私は未亡人に会って来意を告げました。未亡人は私の身元やら学校やら専門やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だということをごに握ったので、いつでも引越して来て差支えないという挨拶を即座に与えてくれました。未亡人は正しい人でした、また判然した人でした。私は軍人の妻君というものはみんなこんなものかと思って感服しました。感服もしたが、驚きもしました。この気性でどこが淋しいのだろうと疑いもしました。

じゅういち
十一

「私は早速その家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中で一番好い室でした。本郷辺に高等下宿といった風の家がぽつぽつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得ていました。私の新しく主人となった室は、それらよりもずっと立派でした。移った当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に違い棚があって、縁と反対の側には一間の押入れが付いていました。窓は一つもなかったのですが、その代り南向きの縁に明るい日がよく差し込みました。

私は移った日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どちらも私の気に入らませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜む父の傍で育ったので、唐めいた趣味を小供のうちからもっていました。そのためでもありませんか、こういう艶めかしい装飾をいつの間にか軽蔑する癖が付いていたのです。

私の父が存生中にあつめた道具類は、例の叔父のために滅茶滅茶にされてしまったのですが、それでも多少は残っていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かってもらいました。それからその中で面白そうなものを四、五幅裸にして行李の底へ入れて来ました。私は移るや否や、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今いった琴と活花を見たので、急に勇気がなくなりました。後から聞いて始めてこの花が私に対するご馳走に活けられたのだという事を知った時、私は心のうちで苦笑しました。もっとも琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむをえずそのままに立て懸けてあつたのでしよう。

こんな話をすると、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠めて通るでしょう。移った私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪気が予備的に私の自然を損なつたためか、または私がまだ人慣れなかつたためか、私は始めてそこのお嬢さんに会つた時、へどもどした挨拶をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。

私はそれまで未亡人の風采や態度から推して、このお嬢さんのすべてを想像してました。しかしその想像はお嬢さんにとってあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君だからあなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうといった順序で、私の推測は段々の延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかつた異性の匂いが新しく入つて来ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりました。

その花はまた規則正しく凋れる頃になると活け更えられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がった筋違の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頬杖を突きながら、その琴の音を聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解らないのです。けれども余り込み入つた手を弾かないところを見ると、上手なのじゃなからうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思ひました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨い方ではなかつたのです。

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾ってくれました。もっとも活方はいつ見ても同じ事
でした。それから花瓶もついで変った例がありませんでした。しかし片方の音楽になると花
よりももっと変でした。ぽつんぽつん糸を鳴らすだけで、一向肉声を聞かせないのです。唄
わないのではありませんが、まるで内所話でもするように小さな声しか出さないのです。し
かも叱られると全く出なくなるのです。

私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそうな琴の音に耳を傾けました。

じゅうに
十二

「私の気分は国を立つ時すでに厭世的になっていました。他は頼りにならないものだとい
う観念が、その時骨の中まで染み込んでしまったように思われたのです。私は私の敵視する
叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しまし
た。汽車へ乗ってさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話
し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくまりました。私の心は沈鬱でした。鉛を
呑んだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今いったごとくに
鋭く尖ってしまったのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因になっているように思われま
す。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなったのだといえればそれまでで
す。元の通りの私ならば、たとい懐中に余裕ができて、好んでそんな面倒な真似はしなかつ
たでしょう。

私は小石川へ引き移ってから、当分この緊張した気分には寛ぎを与える事ができませんで
した。私は自分で自分が恥ずかしいほど、きよときよと周囲を見廻して見ました。不思議にも
よく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなって来ました。私は
家のものの様子を猫のようによく観察しながら、黙って机の前に坐っていました。時々
彼らに対して気の毒だと思ふほど、私は油断のない注意を彼らの上に注いでいたのです。お
れは物を偷まない巾着切みたようなものだ、私はこう考えて、自分が厭になる事さえあつた
のです。

あなたは定めて変に思うでしょう。その私がそこのお嬢さんをどうして好く余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活花を、どうして嬉しがって眺める余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ両方とも事実であったのだから、事実としてあなたに教えて上げるというより外に仕方がないのです。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言付け足しておきましょう。私は金に対して人類を疑ったけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかったのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未亡人の事を常に奥さんといっていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんといえます。奥さんは私を静かな人、大人しい男と評しました。それから勉強家だとも褒めてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかったのか、遠慮していたのか、どっちだかよく知りませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。それのみならず、ある場合に私を鷹揚な方だといって、さも尊敬したらしい口の利き方をしたことがあります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「あなたは自分で気が付かないから、そうおっしゃるんです」と真面目に説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅へ置くつもりではなかったらしいのです。どこかの役所へ勤める人か何かに坐敷を貸す料簡で、近所のものに周旋を頼んでいたらしいのです。俸給が豊かでなくて、やむをえず素人屋に下宿するくらいの人だからという考えが、それで前かたから奥さんの頭のどこかにはいていたのでしょう。奥さんは自分の胸に描いたその想像のお客と私とを比較して、こっちの方を鷹揚だといって褒めるのです。なるほどそんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だったかも知れません。しかしそれは気性の問題ではありませんから、私の内生活に取ってほとんど関係のないのと一般でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体に押し広げて、同じ言葉を応用しようとするのです。

じゅうさん
十三

「奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほどきよろ付かなくなりました。自分の心が自分の坐っている所に、ちゃんと落ち付い

ているような気にもなれました。要するに奥さん始め家のものが、僻んだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしょう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風に取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言するごとく、実際私を鷹揚だと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それほど外へ出なかったようにも考えられますから、あるいは奥さんの方で胡魔化されていたのかも解りません。

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談をいうようになりました。茶を入れたからといって向うの室へ呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買って来て、二人をこっちへ招いたりする晩もありました。私は急に交際の区域が殖えたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向邪魔にならなかったのです。奥さんはもとより閑人でした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもって見えました。それで三人は顔さえ見るといっしょに集まって、世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲って、私の室の前に立つ事もありますし、茶の間を抜けて、次の室の襖の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来てちょっと留まります。それからきつと私の名を呼んで、「ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていますから、傍で見たらさぞ勉強家のように見えたのでしょう。しかし実際をいうと、それほど熱心に書物を研究してはいなかったのです。頁の上には眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているくらいなものでした。待っていて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行って、こっちから「ご勉強ですか」と聞くのです。

お嬢さんの部屋は茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋にいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕切があっても、ないと同じ

事で、親子二人が往ったり来たりして、どっち付かずに占領していたのです。私が外から声を掛けると、「おはいんなさい」と答えるのはきっと奥さんでした。お嬢さんはそこにいても滅多に返事をした事はありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があって私の室へはいったついでに、そこに坐って話し込むような場合もその内に出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒されて来のです。そうして若い女とただ差向いで坐っているのが不安なのだとはばかりは思えませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。しかし相手の方はかえって平気でした。これが琴を浚うのに声さえ碌に出せなかったあの女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかったのです。私の眼にはよくそれが解っていました。よく解るように振舞って見せる痕迹さえ明らかでした。

じゅうし 十四

「私はお嬢さんの立ったあとで、ほっと一息するのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持ちになるのです。私は女らしかったのかも知れませんが、今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃の私たちは大抵そんなものだったのです。

奥さんは滅多に外出した事はありませんでした。たまに宅を留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口からいうのは変ですが、奥さんの様子を能く観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えるのです。それでいて、或る場合には、私に対して暗に警戒するところもあるようなのですから、始めてこんな場合に会った私は、時々心持をわるくしました。

私は奥さんの態度をどっかかに片付けてもらいたかったのです。頭の働きからいえば、それが明らかな矛盾に違いなかったのです。しかし叔父に欺かれた記憶のまだ新しい私は、もう一歩踏み込んだ疑いを挟まずにはいられませんでした。私は奥さんのこの態度のどっち

かが本当で、どっちかが偽りだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそんな妙な事をするかその意味が私には呑み込めなかったのです。理由を考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗り付けて我慢した事もありました。必竟女だからああなのだ、女というものはどうせ愚かなものだ。私の考えは行き詰まればいつでもここへ落ちて来ました。

それほど女を見縊っていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊る事ができなかったのです。私の理屈はその人の前に全く用を為さないほど動きませんでした。私はその人に対して、ほとんど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に應用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気高い気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端があって、その高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕まえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事のできない身体でした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いを帯びていませんでした。

私は母に対して反感を抱くと共に、子に対して恋愛の度を増して行ったのですから、三人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑になって来ました。もっともその変化はほとんど内面的で外へは現れて来なかったのです。そのうち私はあるひよっとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという気になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どっちも偽りではないのだろうと考え直して来たのです。その上、それが互い違いに奥さんの心を支配するのでなくって、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんができるだけお嬢さんを私に接近させようとしていながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として二人を接近させたがっていたのだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近づく念の萌さなかつ

た私は、その時入らぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれからなくなりま
した。

じゅうご
十五

「私は奥さんの態度を色々総合して見て、私がこの家で充分信用されている事を確
かめました。しかもその信用は初対面の時からあったのだという証拠さえ発見しました。他
を疑り始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に比べ
ると女の方がそれだけ直覚に富んでいるのだらうと思いました。同時に、女が男のため
に、欺されるのもここにあるのではなかろうかと思いました。奥さんをそう観察する私が、お
嬢さんに対して同じような直覚を強く働かせていたのだから、今考えるとおかしいので
す。私は他を信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。それで
いて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件については何もい
わなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえすでに一種の不愉快を感じました。私はな
るべく奥さんの方の話だけを聞こうと力めました。ところがそれでは向うが承知しません。
何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はどうとう何もかも話してしまいま
した。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだ
と告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は
話して好い事をしたと思いました。私は嬉しかったのです。

私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したといわなければかりの顔をし出
しました。それからは私を自分の親戚に当る若いものか何かを取り扱うように待遇するの
です。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいです。ところがそのうちに私の
猜疑心がまた起って来ました。

私が奥さんを疑り始めたのは、ごく些細な事からでした。しかしその些細な事を重ねて行
くうちに、疑惑は段々と根を張って来ます。私はどういう拍子かふと奥さんが、叔父と同じ
ような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力めるのではないかと考え出したのです。
すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾な策略家として私の眼に映じて来たのです。私
は苦々しい唇を噛みました。

奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をするのだと公言していました。私もそれを嘘とは思いませんでした。懇意になって色々打ち明け話を聞いた後でも、そこに間違いはなかったように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊かだというほどではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と特殊の関係をつけるのは、先方にとって決して損ではなかったのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前いったくらいの強い愛をもっている私ですが、その母に対していくら警戒を加えたって何になるでしょう。私は一人で自分を嘲笑しました。馬鹿だなと、自分を罵った事もあります。しかしそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶は、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家ではなかろうかという疑問に会って始めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだらうと思うと、私は急に苦しくって堪らなくなるのです。不愉快なのではありません。絶体絶命のような行き詰まった心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかったのです。だから私は信念と迷いの途中で立って、少しも動く事ができなくなってしまうました。私にはどっちも想像であり、またどっちも真実であったのです。

じゅうろく
十六

「私は相変らず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へはいる活字は心の底まで浸み渡らないうちに烟のごとく消えて行くのです。私はその上無口になりました。それに二、三の友達が誤解して、冥想に耽ってでもいるかのよう、他の友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好い仮面を人が貸してくれたのを、かえって仕合せとして喜びました。それでも時々気が済まなかったのでしょう、発作的に焦燥ぎ廻って彼らを驚かした事もあります。

私の宿は人出入りの少ない家でした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありましたが、極めて小さな声で、いるのだかいないのだからわからないような話をして帰ってしまうのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでした。

たけれども、宅の人に気兼ねをするほどな男は一人もなかったのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんがかえって食客の位地にいたとおなじ事です。

しかしこれはただ思い出したついでに書いてだけで、実はどうでも構わない点です。ただそこにどうでもよくない事が一つあったのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室で、突然男の声が聞こえるのです。その声がかまた私の客と違って、すこぶる低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮を与えるのです。私は坐っていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それともただの知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。

それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案して見るのです。坐っていてそんな事の知れようはずがありません。そうかといって、起って行って障子を開けて見る訳にはなおいきません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を打って私を苦しめます。私は客の帰った後で、きっと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追窮する勇気もっていません。権利は無論もっていません。私は自分の品格を重んじなければならぬという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏切っている物欲しそうな顔付とを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。それが嘲笑の意味でなくって、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐に解釈の余地を見出し得ないほど落付を失ってしまうのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじゃないかならうかと、何遍も心のうちで繰り返すのです。

私は自由な身体でした。たとい学校を途中で已めようが、またどこへ行ってどう暮らそうが、あるいはどこかの何者と結婚しようが、誰とも相談する必要のない位地に立っていました。私は思い切って奥さんにお嬢さんを貰い受ける話をして見ようかという決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもそのたびごとに私は躊躇して、口へはとうとう出さずにしまったのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分かりませんが、その代り今までとは方角の違った場所に立って、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇気は出せば出せたので

す。しかし私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乗るのは何よりも業腹でした。叔父に欺された私は、これから先どんな事があっても、人には欺されまいと決心したのです。

じゅうしち
十七

「私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵えろといいました。私は実際田舎で織った木綿ものしかもっていなかったのです。その頃の学生は絹の入った着物を肌に着けませんでした。私の友達に横浜の商人か何かで、宅はなかなか派出に暮しているものがありました。そこへある時羽二重の胴着が配達で届いた事があります。すると皆ながそれを見て笑いました。その男は恥ずかしかがって色々弁解しましたが、折角の胴着を行李の底へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄ってたかって、わざと着せました。すると運悪くその胴着に蝨がたかりました。友達はちょうど幸いとも思ったのでしょう、評判の胴着をぐるぐると丸めて、散歩に出たついでに、根津の大きな泥溝の中へ棄ててしまいました。その時いっしょに歩いていた私は、橋の上に立って笑いながら友達の所作を眺めていましたが、私の胸のどこにも勿体ないという気は少しも起りませんでした。

その頃から見ると私も大分大人になっていました。けれどもまだ自分で余所行の着物を拵えるというほどの分別は出なかったのです。私は卒業して髯を生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないものだという変な考えをもっていたのです。それで奥さんに書物は要るが着物は要らないといいました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中には字引きもありますが、当然眼を通すべきはずでありながら、頁さえ切っていないのも多少あったのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだという事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実の下に、お嬢さんの気に入るような帯か反物を買ってやりたかったのです。それで万事を奥さんに依頼しました。

奥さんは自分一人で行くとはいいません。私にもいっしょに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないというのです。今と違った空気の中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといっしょに歩き廻る習慣をもっていなかったものです。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊躇しましたが、思い切っで出掛けました。

お嬢さんは大層着飾ってました。地体が色の白いくせに、白粉を豊富に塗ったものだから
なお目立ちます。往来の人がじろじろ見てゆくのです。そうしてお嬢さんを見たものはきっと
その視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋へ行って買いたいものを買いました。買う間にも色々気が変わるので、思ったよ
り暇がかかりました。奥さんはわざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をするのです。
時々反物をお嬢さんの肩から胸へ豎に宛てておいて、私に二、三步遠退いて見てくれろとい
うのです。私はそのたびごとに、それは駄目だとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前
の口を聞きました。

こんな事で時間が掛って帰りは夕飯の時刻になりました。奥さんは私に対するお礼に何かご
馳走するといつて、木原店という寄席のある狭い横丁へ私を連れ込みました。横丁も狭い
が、飯を食わせる家も狭いものでした。この辺の地理を一向心得ない私は、奥さんの知識に
驚いたくらいです。

我々は夜に入って家へ帰りました。その翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉じ籠
ってました。月曜になって、学校へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から調戲わ
れました。いつ妻を迎えたのかといつてわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は
非常に美人だといつて賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男にど
こかで見られたものとみえます。

じゅうはち
十八

「私は宅へ帰って奥さんとお嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。しかし
定めて迷惑だろうといつて私の顔を見ました。私はその時腹のなかで、男はこんな風にし
て、女から気を引いて見られるのかと思いました。奥さんの眼は充分私にそう思わせるだ
けの意味をもっていたのです。私はその時自分の考えている通りを直截に打ち明けてしま
えば良かったかも知れません。しかし私にはもう狐疑という薩張りしない塊りがこびり付いて
いました。私は打ち明けようとして、ひょいと留まりました。そうして話の角度を故意に少し
外らしました。

私は肝心の自分というものを問題の中から引き抜いてしまいました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探ったのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、明らかに私に告げました。しかしまだ学校へ出ているくらいで年が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しました。奥さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色に大分重きを置いているらしく見えました。極めようと思えばいつでも極められるんだからというような事さえ口外しました。それからお嬢さんより外に子供がないのも、容易に手離したがる原因になっていました。嫁にやるか、婿を取るか、それにさえ迷っているのではなからうかと思われるところもありました。

話しているうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。しかしそれがために、私は機会を逸したと同様の結果に陥ってしまいました。私は自分について、ついに一言も口を開く事ができませんでした。私は好い加減なところで話を切り上げて、自分の室へ帰ろうとしました。

さっきまで傍にいて、あんまりだわとか何とかいって笑ったお嬢さんは、いつの間にか向うの隅に行って、背中をこっちへ向けていました。私は立とうとして振り返った時、その後ろすがたを見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚の前にして坐っていました。その戸棚の一尺ばかり開いている隙間から、お嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めているらしかったのです。私の眼はその隙間の端に、一昨日買った反物を見付け出しました。私の着物もお嬢さんののも同じ戸棚の隅に重ねてあったのです。

私が何ともいわずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になって、私にどう思うかと聞くのです。その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ解らないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判然した時、私はなるべく緩くいな方がいいだろうと答えました。奥さんは自分もそう思うといいました。

奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなっている所へ、もう一人男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家庭の一員となった結果は、私の運命に非常な変化を来しています。もしその男が私の生活の行路を横切らなかつたならば、おそらくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立って、

その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅へ引張って来たのです。無論奥さんの許諾も必要ですから、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。ところが奥さんは止せといました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せという奥さんの方には、筋の立った理屈はまるでなかったのです。だから私は私の善いと思うところを強いて断行してしまいました。